

「日本の音楽」を身近に感じられる子どもの育成 — 小中連携を図った音楽活動の取り組み —

所属校：江戸川区立葛西中学校
氏名：阿部みどり
派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：日本の音楽・小中連携・音楽活動の取り組み

I 研究の目的

1. 研究の必要性

東京都に暮らす外国人が41万人を超え、海外在留邦人も100万人に達した（都総務局統計）。毎年7人に1人が海外渡航している計算になる（法務省出入国管理統計）。このように国際化が進み、国際交流が盛んに行われる世の中になってきたが、国際社会で活躍する日本人として、いったいどれ位の人が、日本のよさや特色について紹介できるだろうか。

国際交流の場で、他国の留学生は故郷の歌や楽器を演奏し、自国のよさを進んで紹介しようとするのに対し、日本人は日本らしいものの紹介ができない状況にある。そして、地域の盆踊りや祭りさえも無縁になりゆく現状にある。

自国のよさを肌で感じ、誇りに思うことができなければ、他国の文化を理解したり、その国を尊重する段階には進まない（佐藤正寿2005）。よって、真の国際交流とは、自国の文化や特徴を認識しているかどうかが鍵となる。

そのことから、平成10年の学習指導要領改訂では、「和楽器」の取り扱いが記載された。『日本の伝統・文化に対する理解の促進』（東京都教育ビジョン重点施策27 2008年）や新しい法令等（教育基本法、学校教育法、中教審答申、新学習指導要領）にも「日本の音楽」を授業で取り扱う趣旨が明記され、今まさに学校で指導されることが強く叫ばれている。

しかし、「日本の音楽」の経験が少なく知識や技能が十分に身に付いているとは言い難い音楽教師が、学習指導要領に明記されたことのみを受けて授業を行うことは、「日本の音楽」の魅力を児童生徒（以下、子ども）に伝えるどころか、一方的な押しつけになる可能性もある。「日本の音楽」のよさを進んで紹介し、学び続けようとする子どもの育成には繋がらない。

では、どうすれば子ども自身が「日本の音楽」のよさや魅力を肌で感じ、自分なりの価値として堂々と紹介できるのか、「日本の音楽」を身近に感じられる子どもの育成に向け、その有効な取り組みを本研究で明らかにする。

2. 課題の明示

【課題1】「日本の音楽」を進んで紹介できない。

【課題2】日常生活で「日本の音楽」に接する機会が少なく、身近に感じていない。

【課題3】中学校3年間の取り組みのみでは、生涯に渡って親しんでいく態度に繋がりにくい。

本研究は、「日本の音楽」を身近に感じられ、主体的に取り組める子どもの育成に向けて、小中連携の在り方を模索する研究課題である。

II 研究の方法

1. 研究の視点

【視点1】「日本の音楽」を学校で学ぶ意義は何か。

【視点2】「日本の音楽」を身近に感じられる子どもの育成に向けてどうすれば良いか。

【視点3】「日本の音楽」を柱に義務教育9年間の学習指導計画のモデルを作成し提案する。

2. 研究の手順

①文献研究 ②調査研究 ③実践研究 を並行して研究を進め、まとめを行った。

III 研究の結果

1. 文献研究より

(1) 「日本の音楽」の範疇

ここでは山内の定義（1999）を用いることとする。

「日本の音楽」とは、日本で行われた、また行われているすべての音楽を総称する最も包括的な用語。「日本音楽」と同義に用いられ、日本民族固有の最も広い意味の音楽であり、「邦楽」だけでなく洋楽とその影響下に成立した音楽も含むものとする。

(2) 「日本の音楽」を学校で学ぶ意義

なぜ今、学校で「日本の音楽」を学ぶのか。その意義を3点挙げる。

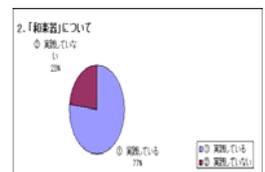
- ① 「日本の音楽」のよさを感じ、自分なりの価値として見だし、紹介できる子どもの育成のため
- ② 日本の自然や風土、言語などの中で育まれる日本の音や音楽のよさに気づかせ、感性を呼び覚ますため
- ③ 地球上に存在する多種多様な音楽の一つとして「日本の音楽」を知ることから、様々な音楽の価値がわかる力を育てるため

2. 調査研究より

(1) アンケート調査

① 「日本の音楽」に触れる機会の現状

【全日本音楽教育研究会中学校部会（2007）中学校事務局、全国都道府県49支部各5校（計245校）に直接依頼実施147校回答】



約70%の中学校が「3年間で1種類以上」の和楽器を用いた授業を既に行っていた。にもかかわらず、「日本の音楽」を進んで紹介できる現状に至っていない。

②今までに経験した音楽に関する行事などへの興味・関心の意識調査

【所属校（中1生徒）150名 2009年5月】

学校での経験を書いた生徒が大多数で、学校外はわずか5名だった。このことから、学校で行う内容が子どもの興味関心へと直結することが分かった。

この調査をきっかけに学区の3つの小学校がどんな授業を行い、子どもがどんな取り組みに興味関心を示すのか、という傾向が見えてきた。

一方、一般的な公立小中学校の各学校段階で行われている音楽科の授業内容や指導方法は、連続性に欠けている（高道2008）ことを実感することとなった。

（2）魅力ある小学校の授業実践から

①「日本の音楽」を柱に年間指導計画を組み立てている小学校の授業実践

②都内小中連携・一貫予定校の音楽活動の取り組みの実践、

3. 実践研究より

（1）所属校の音楽活動の取り組み

所属校の小中連携を図った音楽活動の取り組みの一つ「合唱交流会（2009年11月）」後、意識調査を行った。参加者の9割以上が「自分にとって合唱はよいもの」と実感し、他学年の取り組みについても興味関心が高かった。歌唱技能の向上も図られ、所属連携校の「合唱交流会」は大変有効な取り組みと言える。

（2）授業実践

調査研究等を参考に「日本の音楽」の興味関心を高めるための授業実践を試みた。

授業実践Ⅰ	題材名：「和太鼓でアンサンブルを楽しもう！」 （A表現・器楽）対象：中1 日時：2009年11月
授業実践Ⅱ	題材名：「日本の音楽のよさをみつけよう！」 （B鑑賞）対象：中2 日時：2009年12月
授業実践Ⅲ	題材名：「互いの声のよさに気づき、声部の役割と全体の響きとのかかわりを感じ取って歌おう！」 （A表現歌唱）対象：小中連携校小6+中3 日時：2009年

（3）義務教育9年間の系統性のある指導

「日本の音楽」を身近に感じられる子どもの育成に向け、「日本の音楽」を柱に系統性を図った義務教育9年間の年間指導計画のモデルを作成した【小中連携を図った「日本の音楽」を柱にした義務教育9年間の学習指導計画のモデル】。

IV 考察

合唱交流で成果をおさめた、そのやり方にヒントを得、未知のものである「日本の音楽」にも交流会スタイルを活用できれば、押しつけではなく「日本の音楽」を身近に感じられるようになる、というものである。

小学生は、身近な中学生にあこがれを抱き「自分もああ、なりたい」という気持ちが生じ、学ぶ意欲を促進させる。「〇〇したい」という次への目標となる。

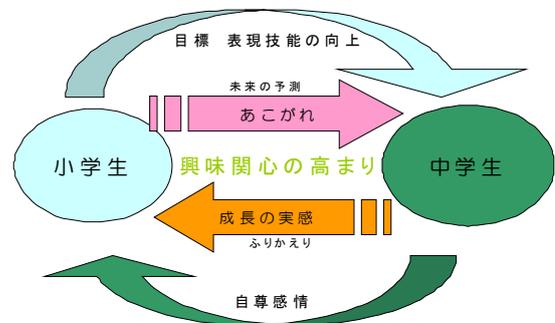
中学生は、小学生の姿から自分の成長を実感し、これまでの過程を振り返ることができる。

発達段階に沿った学びを小中連携を図った音楽活動の取り組みとして交流させることで、あこがれや成長の実感を抱く場として機能し、興味関心が高まる。そこに小中連携の意義が生まれ、こちらが意図した以上の成果が現れる。

小中が計画的に連絡を取り合うことで、系統性のある学びが必然となり、教師にとっても近未来を見通すことが可能となって、現在の子どもの育成につなげることができる。

未知のものである「日本の音楽」を交流させ、良さを共感できれば、興味関心を抱くきっかけとなり、「日本の音楽」を身近に感じられ、合唱交流と同様に自分なりの価値として見いだせるはずだ。

聴衆がいてこそ音楽会が成立するという教科の特性を生かした小中連携を図った音楽活動の取り組みは、交流会スタイルこそ、その教育的効果を上げる。無理に一貫校として枠組みを整えようとするのではなく、むしろ交流スタイルが効果的である。



〈小中連携を図った音楽活動の取り組み構想図〉

V 今後の課題

- ◆「日本の音楽」を身近に感じられる子どもの育成を目指し、「日本の音楽」を柱にした9年間を見据えた指導計画に基づき、授業実践や音楽活動の取り組みを継続していく。
- ◆小中連携を図った音楽活動の取り組みの「日本の音楽」の交流会を機能させる。小中連携を行う一つの視点として、円滑且つ有意義に進めたい。
- ◆国際理解教育（国際交流）、学芸行事等にも「日本の音楽」の活動を積極的に取り入れていく。
- ◆地域に伝わる伝統化文や民謡等を学校で出来るだけ触れて紹介し、子どもと地域とを結ぶ役割を担って

「日本の音楽」を身近に感じられる子どもの育成

－ 小中連携を図った音楽活動の取り組み －

所属校：江戸川区立葛西中学校

氏名：阿部みどり

派遣先：東京学芸大学教職大学院

キーワード：日本の音楽・小中連携・音楽活動の取り組み

いきたい。